

らば、自主的批判といつても言葉だけの自主的であつて、事實は漫りにこれを排斥するか濫りにこれに屈從するか、孰れにしても必ずや失敗である。自主的批判を完うするには、我が傳統的文化を忠實に、且つその全體を謬らぬやうに奉持して行かなければならぬ。そこにはどうしても佛教が東洋の哲學であり、東洋の宗教であり、東洋の倫理の根柢であり、斯の如き思想の事に就いてはあらゆる方面を教へて居るものであるから、眞に自主的批判に眼ざめた時は、先づ第一に佛教の門に走つてその教を乞はなければならぬのであります。

七八

それは教育勅語の中にははつきり示しになつて居らぬやうであるけれども、我が歴史的文明の全體から觀て、吾等祖先の遺風を考へ、又皇祖皇宗の遺訓の全體を考へて來るときには、我が歴世の天皇は殆どすべて佛教を奉ぜられたものであつて、吾等が佛教を信ずるに至つたことも、その最初聖德太子に端を發して、推古天皇の詔に依り、厩代天皇の佛法興隆の事業に基いて來て居るのである、今の教育者が考へるやうなものではない。決して是れは愚民下民の奉じたものではなくして、賢明なる朝廷より起つて國民に篤敬三寶の詔を普及せしめ給ふたものである、最初の頃の寺はみな朝廷の力國家の力に依つて建てられたのである。比叡山は桓武天皇が建てられた、東大寺は聖武天皇が建てられた、その他みな皇室が佛教の興隆には力を添へ給ふた、又天皇が位をお譲りになれば袈裟衣を着け法服を召して、仙洞御所に法皇と稱せられたのは歴代いづれもである。此永き千餘年の間が日本文化の大事な時期である、聖德太子以前の日本の文明は、大事なものがあつたにしても、思想文化としては未だ發達せざる時である、明治維新の當年に來る迄の日本の文明、是は全く皇室を初めとして一般民衆がみな佛教を遵奉して參つたものであります。それ故に自主批判律に於てはどうしても佛教の事を明かにしなければならぬ。

## 十、統一大成律